

---

 コメント
 

---

 「物性研究」をどのような雑誌にするのか？  
 一人のアウトサイダーの意見

長谷田 泰一郎 (阪大OB)

(1994 年 6 月 22 日受理)

物性研究が今年で30年になった。10年、20年の時にならって特集号を出さねばということで、日頃、編集に苦勞しておられる方々が集まって「30周年記念座談会」をひらいて現状を分析しておられる。(Vol.61 No.4, 1994/1) その席でアウトサイダーにも何か書かせようということになったのだと伺いました。

20周年の時には「これからの物性物理」という副題がついていて、それなりの展望や提案が寄せられたほか、読者の意識調査も行われて、本誌に対する期待や希望が集められていた。

しかし、今回はどうやらもう少し深刻で、原稿集めがままならない、自発的な寄稿は2号に1編といったところまで落ちこんでいるのだそうで“物性研究誌をどういう雑誌にするのか？”という副題をつけて、さて、これからどうしようかという議論であった。

冒頭に池田編集長の諮問がある。”巷間にあふれ飛び交っている情報誌は、ある程度声価の定まった話題を目玉にしているが、我々が交換したい情報は、ただ消費されるだけの、そんな種類のものではなくて、本当にさわればヤケドしそうな情報なのである。本誌こそ、そんなことの可能性が期待される唯一の雑誌であるはずなのにどうしてそうならないのか？ そのところを議論してくれと求めている。

アウトサイダーとして期待が大きすぎたのだろうか、残念ながら始まった座談会では、それぞれの立場のからみ合いの中で、話はそれたり、ゆきちがったりで、ホントに求める情報のやりとりの話になかなか焦点はしぼられてこない。

実は深刻と言っても、今のところ、どうやら発行を続けていける程度の注文はあるとことで、まことに優雅な形而上の悩みというところもあるようで、アウトサイダーとしては、そうは無いハイなチャンスと受けとって、責任あるインサイダーには、口に出せない本音本心を、心ゆくまで無責任に、こうあって欲しいとか、こうしたらどうですかなど言わせていただこうかと思えます。

よく例にひかれるパウリの名せりふ「まちがってさえいなくつもらぬ論文」をもちって「ヤケドする恐れもない情報」を伝える位しかすることがないなら、もうやめてしまえ

といきまいていたら、此間乗ったタクシーで「1万2千人で都大路を走ろうとやら言うてますけど、もひとつですな。いっそ参加したら1200円くれるのならよろしおすけど」と言われて、フト心なごんだことであつた。今、京都は、平安遷都1200年を記念して盛上げようと懸命なのである。講演会、座談会はもとより、展覧会や芝居などなど。京舞とか、薪能とか。いずれも声価を追って目白押しである。たまにヤケドをしそうなものないわけではなくて、マイノリティのがんばりに声援が送られている。さすが京の町と思うことがあります。

我が物性研究誌は、前身の物性論研究以来、ほかの情報誌と甚だ異質の読者と投寄稿者と編集者をサポーターとしてやって来て、この後に及んで「のんびんだらりとやって来たのが30年つづいた原因だろう」などとぬけぬけと書かれている。(30年座談会) さすがと思う。我田に水を引く話で恐縮ですが、のんびんだらりというのは第一線を目指すよりは第一流をねらっている心に通じるのではあるまいか。(20年記念号、長谷田)

物性の将来像などと開き直らないで、ぶつぶつ言いながら我が道をいくのが本筋という考え方のように思います。これ迄本誌のあり方について、マイノリティ指向がよく提案され支援されてきたのも一つ同じ考え方である。表文化と裏文化とか、マジョリティとマイノリティとか言うけれども、実はメービウスの環であるという松田元編集長のコメント(10年記念号 Vol.20 No.3, 1973)もめったにないこのサポーター達の中にこそ理解され納得されてきたのだと思う。

こうして10年、20年、30年をふり返ってみて、この物性研究誌という少数個性派は、たしかに華やかな世俗の情報誌にとり残されるのは無理もないと思う。

この優れたものを残す為には、優雅なことなど言ってははいられないという気になって、インサイダーには出来ない提案を2つすることにします。まず

(1) 編集委員を学部または修士課程の学生の中から依頼する。(2) 投稿規定に、レフェリー無しはそのままにして、編集委がおことわりすることがあるを除く。但し、投稿者の機会均等は全員に適用する、を加える。

20才台をそろえて将来像が浮かんでこないなら、その集団には将来はないということ。全く自由に情報をやりとりしても、何も新しいものが出てこないなら、そういう集団であるということ。

創造的なものは、若さと自由の中からしか生まれたためしがなかった事をどうして我々は、時々忘れるのであろうか、というのが編集長の諮問に対する答です。

最後に、個人的な本音本心を、すこし言わせて戴きます。

近頃の政治屋さんの—改革案とか—試案とかはすべて本音本心どころか、宣伝文にさえ理想の理の字もでてこない。この惨状は、しかし、決して政治屋さんだけのものではなくて、選んだ我々も、実に情けない状態にあるように思うのです。どちらに向かって研究

を進めていこうか、ひとりひとり理想や夢を追っている積もりが、気がついてみると、どうすれば第一線の研究がつづけられるか、どうすればヤケドしないで研究費がとれるかにうつつをぬかしているのに、ハッとすることがあるのではないのでしょうか。こんなことが言えるのがアウトサイダーの強味？

30年座談会の終わり30分頃から、研究費の配分方式について、この雑誌でも議論しようということで、かなり立ち入った議論が交わされている。実は、近頃、この問題について、相当危惧を感じている読者がいるのは確かだという前提での展開であった。現状は政界のゼネコン方式と変わらないという極論から、アクセス権の有無とか、人脈とか、モラルとか、相当生ぐさい話まで、しかし、熱心に取り上げられている。

話題をひろげられた事に敬意を表して、生ぐさと優雅もメービウスの帯であるという達見をして、物性研究誌のひとまわり大きい発展を祈ることにしようと思います。